
夜兎と人の血

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜兎と人の血

【Nコード】

N5184Z

【作者名】

獅兔羅

【あらすじ】

万事屋銀ちゃんのオーナー坂田 銀時。

そんな、彼の元に一人の青年がやってくる。

そして、高杉が江戸に・・・。

神威が・・・。

桂が・・・。

辰馬が・・・。

新八と神楽が・・・。

第零訓 自分の血（前書き）

初の投稿です。

獅兎羅っです^^

神威、高杉、銀時バ力です。

神威と高杉が出すぎるかも・・・。

残酷な描写がある話もあります。

第零訓 自分の血

俺はなんでここに存在してしまったんだろう。

攘夷戦争に出て知った。

俺の真実を・・・。

天人を倒すために参加したのに・・・。

俺の血が楽しんでいる・・・。

殺すことを楽しんでいる。

心から・・・。

楽しんでいやがる・・・。

殺すことを楽しむために参加したんじゃない・・・。

なのに、なのに・・・。

俺の血は一体何なんだ・・・？

そこで知った俺の出生の秘密を・・・。

俺は・・・。

「夜兎」

だっ たんだ・・・。

人間と夜兎の・・・

子供だっ たんだ・・・。

俺は生まれてきたことが間違いなんだ。

俺の血は

穢れている・・・。

第零訓 自分の血（後書き）

どうでしたか？

いきなりオリキャラ出しちゃいました・・・。

次はどうなるかな・・・。

感想よろしく願います^^

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(前書き)

2話目書けました。
結構つかれた。

第一訓 お母さん発言は20歳から（改）

「新八、出勤しました。」

いつものように朝から新八の声が響く。
ここは万事屋銀ちゃん。

「神楽ちゃん、起きて。」

新八は押入れを開ける。

「・・・あと5時間・・・。」

「そんなこと言わずに早く起きて。」

新八はそう告げ、隣のふすまを開ける。

「銀さん、早く起きてください。」

「もう少し寝かせろよ。今日はお天気お姉さんもないんだから・・・。」

新八はため息をつく。

「はあ。銀さんもいい大人なんだから一人で起きれるようにしてください。」

「んなもん知るか。つーか新八、お母さん発言は20歳になってからだろ。」

「そうアルヨ。だからお前は新一じゃなくて新八ネ。なんだよぱちつて。」

そんなこと言うのはいつの間にか起きてきている神楽だ。

「そんなもんは原作者に言え！僕に言われてもわからないよ。」
「なに？ワンパークの人にいうの？」

と銀さん。

「ちげーよ。銀魂のだよ。銀魂の。ワンパークの人に言ったら全然わからないでしょ！」

「んなもん分かんないよ。もしかしたら知ってんじゃないか。」

「そんなわけあるか！！」

「つーか騒いだせいで目が覚めちまったよ。どうすんだ。」

ダルそんな眼をした銀時が言った。

「どうすんだじゃないわー！」

新八のつつこみ。

「わーったよ。起きりゃいんだろ。」

あれこれあったが新八は銀時と神楽を起こすことに成功した。

「って、これなんのミッション？作者さん。」

第一訓 お母さん発言は20歳から(改)(後書き)

どうでしたか？

新八ってこんなん？って思いながら書きました。

結構似てない・・・かも。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（前書き）

第一訓、読んでみて・・・
メッサ読みにくい・・・。
すいませんでした。

第二訓からは少しか改善されました。

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる

「暇だあゝ。依頼ねえーのか？」

銀時がぼやく。

「ぼやかないでください。大体いつも全然来ないじゃないですか。」

新八の正論。

万事屋「なんでも屋がこの万事屋銀ちゃん。」

そのため、怪しがるのか・・・依頼はほとんどこない。

「仕方ないネ。私と銀ちゃん以外の従業員がダメガネだからナ。」

毒舌発言の神楽。

「依頼来ても大体僕しか働いてないよ、神楽ちゃん。」

「それが雑用の仕事アル。」

またも、毒舌発言の神楽。

「さつきと矛盾してる。」

と新八。

プルルルル、プルルルル。

「あつ電話アル。」

「お、依頼か？」

銀時は電話に出る。

「はい。万事屋銀ちゃんです。」

『外に出なよ。』

「はあ？」

『いいから外に来て。』

その声は男らしいが子供っぽく、声が高かった。

「オメーはいつてえ誰だ？」

『……』

プツ。

電話が切れた。

（なんだ今の……）

「銀さん、誰からですか？」

「わかんねえ……。」

新八と神楽が顔を見合わせた。

（さっきの声どつかで……）

銀時は玄関の方へ歩いて行った。

その後ろに新八と神楽も続く。

ガララララ。

銀時たちが外に出ると屋根の上から人が降りてきた。
その人は傘をさし、赤と黒の着ものを着ていた。
神楽が驚いた顔をしている。

「銀さん、あの傘。」

銀時も驚いた顔を見ている。
前に居る人は夜兎の傘をさしていた。

その人は傘を上げる。
その顔は髪の色がオレンジで、眼の色が青かった。
これは完ぺきに夜兎の特徴とかぶっている。

「久しぶりだね。銀時。」

そう言った青年の顔を見ながら銀時はまだ驚いた顔をしている。

「忘れちゃった。じゃあこれ見たら思い出すかな？」

そう言うと青年は懐から兜割を取り出した。
それを見た銀時は何か思い出したようだった。

「おめーは……。」

第二訓 インパクトが強い奴でも忘れるときは忘れる（後書き）

どうでしたか？

これからどうなる事が・・・
自分でも心配です。

感想、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5184z/>

夜兎と人の血

2011年12月17日18時52分発行